
つまらない旅行殺人事件

上村華月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つまらない旅行殺人事件

【Nコード】

N1823Z

【作者名】

上村華月

【あらすじ】

旅行代理店勤務の嘉子は、ある日「つまらない旅行」プランを提案することに。苦労して山に登ったら頂上に民家があるなど、独特のセンスを披露する。

そのつまらない旅行中にクライアントの上司が殺害されてしまう。犯人は誰だ？嘉子が突き止めた隠された真実とは？

プロローグ（前書き）

旅行代理店勤務の嘉子は、ある日「つまらない旅行」プランを提案をすることに。苦労して山に登ったら頂上に民家があるなど、独特のセンスを披露する。

そのつまらない旅行中にクライアントの上司が殺害されてしまう。犯人は誰だ？嘉子が突き止めた隠された真実とは？

プロローグ

1、プロローグ

佐野嘉子さのよしこは旅行代理店窓口勤務。今年28歳。独身。彼氏なし。仕事に就いて8年。彼女は顧客に対し少しでも満足度の高い旅行の提案をすることにやりがいを感じている。モットーは誠実である。

先日一組の老夫婦に介護センター下見ツアーを提案し、好評を得た。それが旅行会社の重点商品となり社長賞をもらったばかりだ。但し好評が得られたのは会社の一部の上層部からのみではある。介護センターからの高額バックマージンが好評を得たのだ。

今日も嘉子はいつも通り淡々と業務をこなしている。

「南国リゾートでしたら、当社でちょうどハワイキャンペーンをやっております・・・」

大学生らしきカップルに対しても、丁寧にプランの提案を行う。少しでも要望に沿える旅行をと、パンフレットを覗き込む。その度の前に垂れてくる肩まである長い茶色の髪を時折耳に掻き上げる。パンフレットをめくる手つきは慣れたものだ。

「カップルの方に人気のこちらのホテルはいかがですか？」嘉子は笑顔で尋ねる。

「もう少しショッピングセンターに近いホテルがいいな」と彼女。

「俺は海でパラセイリングがしたいかも」と彼氏。

「私はイルカが見たい」

大抵の客は、カウンターの前では気持ちが大きくなり、次から次へ

と新しいチャレンジブルな要望を出してくる。

「それでしたら、ベンチホテルをシーサイドに置いた方がアクティビティへのアクセスが良いかもしれませんね。夕食はサンセットに浮かぶダイヤモンドヘッドを眺めながらシャンパンでフレンチがおススメですよ」

嘉子は最高の旅行を楽しんでいたかどうかと、積極的に当店の接客マニユアル通りに横文字を活用する。一般的な日本人は横文字を聞けばロマンチックな幻想を描き始める傾向がある。旅先を実際以上に素敵に目の前に広げられる効果があるようで、セールス手法としてはとても有効的らしい。

そして客の要望もひと通り出たところで、嘉子は日程やホテルなどの条件を目の前のパソコンに入力し始める。

「プランが出来ました。お見積りですが、いただいているご予算よりも7万円程高くなってしまっておりますが、お支払いは現金でよろしかったでしょうか？」客の要望を全て満たすと、いつもこういったことになる。但し嘉子は慣れている。

嘉子の左右に若干離れた二重の目が、カップルに鋭く向けられる。そして右手でおもむろに制服の胸に刺さっているペンをとり、申込書類の作成を始める。やや強引に見えるこの手法も接客マニユアルの実践だ。客が迷うであろうポイントは素通りし、自然を装い強行に一つ話を前に進めるといふもの。

また嘉子自身も旅行プランには一切の妥協もあつてはならないと考えている。それ自体なかなか行けるものではないからだ。すなわち高々何万円の予算オーバー分を節約し、旅の満足度を下げってしまうなどなどという考え方自体が、裕福な家に育った彼女には全く理解出来ないものなのだ。

「・・・あのっ・・・ちょっともう一度プランを説明していただきたいんですけど・・・」

彼氏は彼女の方に向けていた視線を急に嘉子に向けた。そもそもその予算は本当に自分が出せる最高金額で組んであり、それを越えると自らの食費などの生活費を削る以外方法が無かったからである。当分何を食べて生きていけばいいのだろう・・・、但し彼女には少しでもいい旅行をプレゼントしたい・・・。

彼女の方かというと妄想の中で既にハワイに出発し、ビーチサイドでダイヤモンドヘッドの沈む夕日に見とれていた。彼氏の戸惑いによって現実に戻されたことが悔しい。

そして少し考えた。「予算オーバー分は私が出そうか？」
こう言えば彼氏が払わざるを得ない情況を作り上げるはず。男心をくすぐった。

というわけで7万円の過剰な支払いについて、結局彼氏はすんなり受け入れる以外ない。

「ううん、いいって、俺が出すよ。折角ハワイまで行くんだしね」
彼氏は右手で彼女を抑えるように、任せとけといった動きをした。
「そうだね、思いつきり楽しもうね、ヒロ君大好き」

二人の会話はまとまったようだ。

ただヒロ君の頭は旅行ではなく、今からどうやって生活費を削って生きていくかに覆われている。

ちなみに目もうつろになっており、眼球もどこか遠くを見ていた。そしてフラフラと店舗から出て行った。嘉子には彼女の腕組みに支えられて歩いているようにも見えた。

嘉子は昼休みに店舗の事務所奥にある、二人も入れれば窮屈な休憩室で軽い食事を取った。代理店の昼休みはピークタイムを外した少し遅めの時間に設定されている。この日は朝家を出る前に自分で握ってきたおにぎり2つと、コンビニで買ったミニサラダを食べた。そして休憩室に置いてある会社の福利の日本茶を飲み、ぱっとしない味だなと思いつつ、再びカウンターへと戻って行く。

3

「よし、午後も頑張るぞ」

とはいっても店舗がオフィス街にあるため、昼休み明けのこの時間帯はほとんど客は来ない。

しばらくしてフラッと嘉子と年頃も近い小柄な女性が一人で入り口の自動ドアから入ってきた。ショートカットに前へ下ろされた前髪は真っ直ぐに整えられ、黒縁メガネをかけている。メガネの奥に覗える整った顔立ちの割りには格好がダサく惜しい。「FIGHT」と書かれた黄色いTシャツにジーンズを履いていた。

きつと何かのオタクに違いない……。嘉子がそう思っていると、案内板の示すとおり、この女性は嘉子の目の前に腰を落とした。

「いらつしゃいませMGTトラベルへようこそ！」

マニュアル通りに発せられる嘉子の明るい声とは対照的に、女性客は大きめのバッグを大切そうにひざの上に抱えながら、うつむき加減で話し始めた。

「すみません、旅に出たいんですが」

嘉子は女性客のあまりのトーンの低さに戸惑ってしまった。まるで

傷心一人旅に行くような気配すら感じた。

「ど、どのようなご旅行を考えていますか？」

「いやっ、つまらない旅行って何かなって？」

「つまらない旅行と申しますと？」

嘉子が「えーっ」と頭で聞きなれない言葉を必死に整理していると、女性客は話し始めた。

「うまく言えないですが、私も旅行代理店の窓口で働いてるんですけど、最近ずっと悩んでいることがあって・・・」

「実は今更なんですけど、ずっと営業成績があまり良くなくて。もう8年も働いてるんですけど、こないだ上司から面談で、あなたはどいう旅行がプロデューズしたいの？なんて聞かれたんです。

横文字でプロデューズだなんて、ほんと外国かぶれでしかも彼は何かと鼻につくんです。例えばメガネの縁が赤いとか、Yシャツの袖にカフスをつけてたり。しかも私より若くて大学卒業して結婚して子どもまでいるんです。それでプロデューズだなんて言われたんで、もう実際は面談で言われたことなんてあんまり覚えてないというか、聞く気も起きなかつたんです。

けどその日家に帰った後まで、一つ頭に残っていた上司の言葉がありました。彼に頭に言葉を残されたつてもシヤクで、それだけに忘れたくても忘れらなくて。で何を言われたかというところ「君のプロデューズした旅行はつまらないものになってないか？まあ、お前なんかにはつまらない旅行ですらプロデューズ出来ないだろうけどな」なんです。

しかもみんなの前で言われたつてもあつて恥ずかしくて。それ

につまらない旅行なんて仕事中に考えたこともなくて、通勤途中に考えたりしてはみたのですが、それって誰と行くかが大きくて、例えば社員旅行なんかハワイでも行きたくないし、もし行ったとしても帰って来てこう思うんですよね。あーつまらなかつたって。もう行きたくないなって。これが・・・」

嘉子は逐一話に頷きながら、笑顔を取り繕いひたすら聞いていたわけだが、女性客の言っていることがただの愚痴に聞こえた。また話も長くが落ちどころもわからず少し苛立ちを感じていた。ただ一つ分かったのが、この客には接客マニュアルにある、横文字の連呼は通用しないといったところだろうか。

そこで埒も明きそうにないので嘉子は話に割って入ることにした。

「確かに折角のハワイでもそれじゃつまらないですね。あとこう思うんです。すみません話を割ってしまった。つまらない旅行っていえば私は寺周りとかもつまらないって思います。というのも私はお寺とか興味がないので。興味のなさってつまらなさを決める一つの重要なことになって」

「確かに興味は大事かもしれないですね。私も山登りとかあんまり好きじゃないかも」

4

嘉子は一呼吸置いた。そして過去に自分が手配した一つのプランを回顧しながら、おもむろにカウンター脇に重ねて置かれているパンフレットを物色しながら、

「それでしたら山登りに行きましようか。ちょうど山登り好きの方から評判のあまり良くない山があるんです」

「評判が良くないってどういことですか？」

「標高1000メートルの普通の山なんですけど、頂上まで行けないんですよ」

「……」

女性客は嘉子が何を言っているのか分からなかった。そして場を取り繕うべく少し苦笑いをした。

「頂上に山の持ち主が住んでいるので、登った先に見えるのは一軒の民家なんです。先日お客様から登頂直後に、山の持ち主に怒られたとクレームが入ったんです。家の周りで騒ぐなって」

「……。けどそこに行くまでの道のりとか、景色が良かったり、空気が新鮮だったり……」

「いやいや、それも微妙なんです。なんせ頂上に民家がありますからね。登山道の脇にアスファルトの整備された道があつて車が通るんです。苦労して山道を登る脇に車が通って行くんです。やる気なくなりませんか？」

そして嘉子はたたみ掛けるように、過去に受けたクレーム内容を自分がさぞかし行ったことがあるようなニュアンスで細かく女性客に説明し始めた。

「ましてや景色もイマイチです。なんせ周りにもっと高い山がありますから。すなわちどこに行こうが山しか見えないんです。上の方に上つても山、下から望んでも山。結局上から見える景色が下から見えちゃうんです」

「……。では、その山に行くプランをお願いします」

女性客はつまらない旅行とはどういうものなのかが少し分かり始めた。そして話だけでも最後まで聞くかという感じで、ひとまずはOKを出すことにした。

女性客のとりあえずの承認を勝ち取ると、「これは・・・イケる」嘉子は内心そう思った。

要するに過去のクレーム案件をひっぱってくれば良いのだという勝利の方程式を導き出したのだ。自分の提案能力が実感できたため徐々に楽しくなってきた。感じた。ちょうど学生時代に数学や物理の公式の仕組みを理解し、どんどん問題が解け始めるようになってあの感触に似ている。

5

「ありがとうございます」

嘉子はカウンター越しに軽く頭を下げた。そして話を続けた。

「ここからだと電車で行くことになりますが、金曜日の夜出発でよろしいでしょうか？」

「ですが、金曜日は何時に仕事が終わるのが・・・」

嘉子は戸惑う女性客に構うことなくまくし立てた。

「いえ、おススメは絶対この曜日のこの時間帯なんです。というのもおじさんと若い女性が多く乗車されています」

「ひょっとして不倫旅行ってやつですか？奥さんには出張と偽ってってその何というか」

「そう伺っております。二人より添われてその何とか・・・また金曜日ですから、出張帰りで車中にてお酒を飲まれる方も多く臭いも・・・」

「・・・それをお願いします」

女性客はノリノリ状態の嘉子の手前、話はなりゆきに任せることにした。

「宿泊はどうされますか？」 嘉子が聞いた。

「おススメはありますか？」

「はい、ございます」

「少し行った森の中に温泉旅館がございます。ここの温泉はリュウマチや肩こりに効果があるといわれています。朝から晩まで療養のためずっと浸かってらっしゃる方が多いと聞いています」

「旅館は普通なんですか？」

女性客が徐々に話に乗って来た。

「というか朝から晩までずっと浸かっているんです。というのもお湯がぬるいんです」

「はぁ・・・ではそこをお願いします」

女性客は最終的にどういう旅行になるのか、見当がつかなくなっていた。

「当日は旅館にチェックインをされてお食事。その翌日はどうされますか？直接山に行かれますか？それとも・・・」

「他に何かおススメってありますか？」

「はい、近くにトンネルがあります。幽霊が出ると噂の」

「あまり興味がないんですが・・・」

「それは良かったです」

嘉子は次々に決まる自身の提案に、一種の快感を覚えた。体が熱くなってくるのが分かる。一種の興奮状態だ。

「ではこちらで決まりですね！幽霊なんて見えませんから、実際見えるのはトンネルだけなんですけどようど良いかと。しかも一般的に幽霊の出にくいとされる昼間ですから尚更良しですね。

またトンネル内の落書きが凄くて、内容も卑猥だったり下劣なことが多く、マナーの悪さにも腹が立ってくるかと思えます」

「そうなる落書きを見に行く感じですかね・・・。それでトンネル見学の後は、山ですか？」

女性客はいくらなんでもこんな旅行はさすがにちょっと無理だ思い始めている自分に気がついた。

しかし、同時に逆にひらめくことがあった。

「これは・・・イける」

まさか赤メガネもここまでつまらない旅行を想像することは出来ないだろうと内心思った。

女性客は上司につまらない旅行プランの下見をさせることが出来れば、としめしめと考えながら、自分の8年間のキャリアとプライドを傷つけたことへの一種の仕返しに胸が躍ってきた。

7

「はい、トンネルの次ぎはお待ちなかの登山です。山の麓の飲食店は既に潰れてしまっていますので、お食事と水はこちらから旅館にお願いしておきますね」

「その後は下山していただき・・・」

「ちよつと待つてください、その山1000メートルあるんですよ、その・・・日中に戻ってこられるんですか？」

「はい、お車の方はこちらで手配させていただきます」

「下山後は電車に乗って戻ってきたいただく感じになりますが、時間もありますので折角ですからお寺でも見ますか？」

「お寺にはどんな的がありますか・・・？」

女性は期待した。身を乗り出して嘉子の提案に耳を傾けた。

「はい、ですが正確には跡地です。1600年代に徳川家が建立したといわれる由緒正しきお寺です。その位置関係は江戸の北西に位置します。当時北西は徳川家にとって好ましくない方角だったとかで、このお寺が幕府を守っていたとされています。徳川家の繁栄の裏にはこのお寺の存在が大きな意を為していたとのことですよ」

「けど跡地なんですよ？そんな立派なお寺なのにどうして無くなってしまうんですか？」

「それは単に立ち退きです。バブルの頃この辺に一大リゾートを建設する計画があったとかで。今はただの草むらになっています。好きな人はこんな場所でも歴史に想いを馳せることも出来てしまいましたがご容赦いただけますよね？それで住職なんですけど……今は東京の田園調布に邸宅を構えているようです」

嘉子は満悦に浸る女性客を目の前にしての恍惚がたまらなく快感だった。

「というわけで……以上のプランでよろしいでしょうか？1泊2日ですから、お一人で 円になります。それで御社の社員は全部で何名ほど？」

「えっ、会社ですか？」

女性は目を丸めた。会社ではなく上司一人で行かせる予定だったからだ。

「そうです、さっきお客様もおっしゃってましたよね、誰と行くかが大事だって」

「社内旅行などいかがですか？」

「は、はあ」

そして嘉子は旅行のコースと見積りをぱぱと印刷し、女性に渡した。そして笑顔でこう締めくくった。

「是非前向きにご検討願います。それではあなたの上司の参加と、当日の悪天候をお祈りいたしております。それと、お支払い方法は銀行振り込みでよろしかったでしょうか？」

嘉子是他社旅行代理店の社内旅行を取り付けたことが評価され、またもや今月の社長賞候補に上がっている。ただし、ただ単に受賞候補となったのは、嘉子がMGTトラベルの社長の娘だからではないかという噂はある。

殺人事件発生

8、殺人事件発生

アジサイの花が街の道端を様々な色で飾る頃。すなわち、毎日朝から晩まで雨が降り、部屋の中が湿気でカビなど生え始め嫌な気持ちになるこの頃、佐野嘉子に事件は起こった。

昼休憩の後の午後2時過ぎ、嘉子がいつも通り旅行代理店のカウンターで客の来店を待っていると、後ろから上司の声が聞こえた。「佐野さん、お客さん来てるからちよつと奥まで来てくれるかな？」何かのクレームだろうか。嘉子は恐る恐る事務所控え室に入った。

「失礼します」

そう言つてドアを引くと、間から2人のスーツを着た男性が見えた。

「始めまして、警視庁捜査一課の三田と申します。んでこつちが林です」

二人は軽く頭を下げ形式的な挨拶をしてきた。三田は頭を七三分けにし、ビシツとしたスーツでキメている。35歳くらいだろうか。何より突然の刑事の訪問に嘉子の体は硬直していた。

「いやぁお忙しいところすみませんね、それであのちよつとありましてね・・・」

短髪のすらつとした大学生のような男が、あたりを見回している。これが林だ。

「田中慶子さんご存知ですよね？」三田の話をさえぎる形で嘉子に唐突な質問が投げかけられた。

三田は若手の林に話を持っていかれたからだろうか、イラッとした表情を浮かべている。

「お客さんの田中さんでしょうか？」

嘉子は田中慶子という名前を良く覚えていて。それもそのはずで彼女は「つまらない旅行」のクライアントだったからだ。

「そうです。実は彼女が手配した旅行先で殺人事件がありました。三田は話の主導権を林から取り戻す。

「えっ、ということとは・・・」

「そうです、旅行から帰って次の日、つまりは7月4日の朝、彼女の上司なんですけどね。桜井和人さんという方が遺体で見えませんでした」

「正確に言いますと旅行二日目7月3日の朝から姿を消されて、それで今朝遺体となって見つかったというわけなんですよ」

嘉子は自分が手配した旅行で殺人事件が起きるなど、余りに唐突で衝撃を受けた。

さらには田中慶子とは旅行の打ち合わせで何度も会っているからか、他人事とも思えない。

「どうですか、何か旅行に行く前の田中さんに気になるところかありませんでしたかね？」

三田は嘉子の顔をじっと観察するように見つめている。

「おかしいところというか、元気の無い方だなとは感じていました」

「ただ・・・」

情況と気持ちの整理もつかないままではあるが、嘉子に何かしら言葉を発さなければならぬ場の抑圧を感じた。

「ただなんですか？」林は強い口調で突っ込んだ。

「田中さんが犯人ということですか？」

「まだ断定できていません。ただ事件の起きた旅行は田中さんが手配されたものですから、念のためコーディネートされたあなたに確認しているだけですよ」

そして嘉子はただとどしくではあったが、必死に田中慶子との過去のやり取りを一通り刑事に話した。

林は三田にこつそり耳打ちを始めた。「仮に犯人が田中慶子だとすると、動機は十分にあつたといえそうですね」

「ああ、桜井の田中慶子に対する日ごろの態度はパワハラと言えるかもしれないな。それに被害者の死因は転落死だからな」

「そうですね、突き落とすだけなら女性の田中でも絞殺とは違って無理なく出来ますしね。しかし死亡推定時刻はAM10時〜11時の間じゃないですか？田中にはアリバイがあります。彼女は同僚達と一緒にトンネルを見学してたということですし」

「確かにトンネルにいた頃だよな・・・あつすみませんこちらの話で」

三田は林との会話が嘉子にまる聞こえになっていることに気づいた。何せ事務所の休憩室は2人入れればいっぱいになる広さだから。二人の刑事はこんなところで熱くなってしまうていた自分達が少し恥ずかしく感じた。

9

「あつ、いえいえ」

そういうわけで嘉子は刑事達の筒抜けの推測を聞いていたわけだが、一種の違和感が残っていた。

嘉子にはどうしても田中慶子がとても人を殺す人物には見えなかったのだ。

彼女は確かに上司の桜井に恨みを持っていたとは思うが、それは仕事のことで嫌味を言われただけであり、ましてやその仕返しとしての今回の旅行が存在している。だから既に恨みは晴らされているはずだと考えていた。

また嘉子が田中に初めて会った頃は暗い感じに見えたが、何度か会っていくうちに、少しずつではあるが態度が明るくなっていくように思えたというのもある。

「佐野さん、他に何か思い出したこととか、気付いたことありますか？」三田は嘉子に聞いた。

「あの、田中さんの動機っていうか仕事上のちょっとしたことで・・、それくらいで人を殺してしまうというのはどうもおかしい気がするんですけど」

林はため息を一つつくと、ポンと片手を嘉子の肩の上に乗せた。

「上司からの心無い一言とかでも最近は何人かを殺してしまったりそんなご時勢なんですよ。それに刑事ってのは例え可能性が低いにしても洗いざらい調べるのが仕事なんでね」

「お前新人のクセにわかったような偉そうなこと言うな」

すると三田は林の態度が気に食わなかったようで、突然声を荒げた。

ただ嘉子は殺人のことがどうしても不可解で、刑事二人の内輪もめなど気にもしてはいない。

「だとしたらその上司って、桜井さんっていう方ですよ、他の同僚からも同じような恨みを持っていたということはないんでしょうか？私はどうしても田中さんがやったとは思えないんですけど」

「ちなみに佐野さん、お聞きしづらいのですが、あなたのアリバイは？すなわち7月3日午前10時〜11時までどちらにいましたか？」三田は嘉子にズカズカと聞いてきた。

「私のアリバイってことですか？」

嘉子は声が大きくなってしまった。自分が疑われたことがあまりに唐突で思考の整理は当然ついていかない。

「えっ、その日ですよ。私は会社にいました。それで、あのっ、みんな知ってます私が会社にいたこと。だから、犯人ではないです」嘉子はかなりの早口になってしまった。不自然な対応をしてしまい犯人に疑われるのではないかという失敗感が彼女を襲う。

「いえ、いいんですよ。佐野さんのこと疑っているわけではないですから。ただ先程も言いましたけど、刑事の仕事ってそういうものなんです」

「ほんと因果な商売でしょ？すみませんね」

そう林が言つと、嘉子は少しほっとした。

ただ三田は林のじゃばりっぷりが気に食わないようで「だからお前が偉そうなこというな」とまたは林の耳元でささやいていた。

そして二人の刑事は嘉子に軽く会釈をすると、店舗から出て行った。嘉子はとりあえず会社に関することだし、事件の経緯など全く腑には落ちていないが、上司にこの旨を報告することにした。

「ただいま」

嘉子は午後9時過ぎにこの日の勤務を終え東京の世田谷にある自宅に戻った。自宅というか実家暮らしをしている。

未婚の嘉子はここで自身が勤める旅行代理店の社長である父と専業主婦の母と3人で暮している。整理された高級住宅街の一等地にあるこの家は高さ2メートルはあるうかという立派な塀に囲まれている。地下1階の3階建てで、父親が15年ほど前に購入したものだ。現金で一括で買ったと豪語しているがために、近所からは成金屋敷と呼ばれている。

嘉子は30平米の正に西洋風と言うにふさわしいダイニングで、母の作った肉じゃがを夕食に一口二口箸で含んだ。

今日はいろいろあったし食事という気分には到底なれなかった。

食事を終え自分の部屋のある3階まで階段で上っていく途中、「よっちゃん、ちょっと来なさい」2階にある父親の書斎から、嘉子を呼ぶ声が聞こえた。嘉子の階段を上る足音が父親に届いたようだ。

「何か用？」

「こらよっちゃん、部屋に入るときはノックぐらいしなさい」

マナーだとうだと言う割に、父親は偉そうな机のえらそうなイスに座りふんぞり返っていた。嘉子は父のこういうところが好きにはなれないが、あきらめるといふか今更どうでも良いかと思っている。

「今日刑事が会社に来たらしいじゃないか？」

「もう知ってるの？」

「話の内容だけが部下から聞いたよ。うちの会社の手配した旅行だからな、悪影響が出るかもしれないだろ」

「お父さん、ちょっとそれなの最初の一言。私警察に疑われたんだ」

嘉子に溜まっていた何かが涙となって目から流れ出した。

「私ね、今凄く辛い。分かる？確かに私は短大卒業したはいいけど何処にも就職出来なくて。それでお父さんのコネで今の仕事に就いたんだけど、ちゃんとまじめにやってるつもりだし好きなのこの仕事。今回の旅行だってお客さんの要望に添えるようにちゃんと考えてプラン作ったの。けどその要望するのは殺人計画を実行するための要望かもしれない。私はそれを提案してたってことなの」

嘉子の怒りは止まらない。

「まだ田中さんが犯人って決まったわけじゃないみたいだけど、いずれにしても誰かが私の作ったプランを利用したのは間違いないでしょ？もうほんとうに悔しくて・・・もうお父さん一生私に構わないで」

ボタン。

嘉子は父親の書斎のドアを勢いよく閉めると、自分の部屋へと駆け上がっていった。ベッドに思い切り飛び込むと、パジャマに着替える気力もなく気持ちは高ぶってはいたが、疲れもあってそのまま眠りについた。

1
1

翌日嘉子はいつも通り午前10時に出社した。

「佐野さん、お父さんがお呼びだよ」

カウンターに座ろうとした時、上司から声がかかった。

「私行きません。以上」嘉子はむっとしながら声の方を見ることなく即答した。

父親といざこざがあった翌日は大抵こうなる。父は会社の権力を使

って無理やり私と話しをする場所を作るのだ。嘉子はこのやり方はつくづくうんざりしている。

すると上司が嘉子の元へ駆け寄ってきた。

「ちよつと佐野さん、頼むよ。もし佐野さんが行ってくれないと今度は俺が上司から呼び出されるって知ってるでしょ？こないだの何だっけか、犬を飼う飼わないのケンカの時だつてさ・・・」

「分かりましたよ」嘉子はそのつと立ち上がり上司の方を向き、そして額にかかる前髪を掻き上げると、目を細め軽く睨みをきかせた。父親への苛立ちが増幅するも、上司には日ごろからコネ入社の人自身に対しても他の社員と平等に扱ってくれている感謝もあった。よつて上司の面子のため、全く行きたくはないが呼び出しに応えることにした。

「そんな目しなくなつていいじゃんか佐野さん、頼むよつてかありがとね」

上司はひと段落に胸をなでおろした。

嘉子は先ほど着替えたばかりの制服をまた私服に着替え戻すと、勤め先の店舗から電車で一駅行ったところにあるMGTトラベル本店に向かった。55階建ての高層オフィスビルからは東京湾が一望出来る。本店事務所はこのビルの40階のワンフロアを間借りしている。

「お疲れ様です」

嘉子が事務所に入るとあちこちから挨拶が聞こえてきた。ここで働く人達は彼女が社長の娘であることを良く知っている。全員立ち上がり妙にニコニコしながら迎える雰囲気はどうしても気に食わない。

「全く、みんな上ばっかり見てさ、自分の仕事にもっと誇りをもつて欲しいものだわ」
ブツブツ言いながら彼女は茶色い木製の立派な社長室のドアの前に到着した。

嘉子はノックをし「失礼致します」と言っで一礼してから部屋に入った。

会社では父親と接する時、意識して家族関係を持ち込まないようにしている。

部屋に入ると父親と、その脇に見知らぬ一人の女性が部屋の真ん中にある応接セットに腰かけていた。

「おーよっちゃん、来てくれたか」

社長は立ち上がって、嬉しそうに両手を広げ嘉子を迎え入れた。

「社長、失礼ですがその呼び方は止めていただけないでしょうか？」

「何言ってるんだ、よっちゃんはよっちゃんだろ」

「あの、会社ですから佐野と呼んただけだと思います。さらに社長の命令ですから、来るのは当たり前です。それで用件はなんでしょうか？」 嘉子は挑戦的な目で、社長の寵愛をさらりと返した。

「よっちゃん、そんな固いこと言わないで欲しいな。お父さん昨日のことを謝りたくてさ・・・」

「それ位のことと呼び出さないでっていつも言ってるでしょ」
こうなることは分かっていたし、あきらめている部分もあったが、しつこい対応にさすがに嘉子もキレた。

「もう何なの？ 私忙しいの、分かるでしょ？ 私がカウンターから抜けたから、他のみんなに迷惑かけてるの」

「まあいいじゃないか、大事な話があるんだ。昨日お父さん反省したんだ。よつちゃんがどれだけ辛かったかかってことをな。それなのに会社の利益を守るためとはいえあんなこと言ってしまったってごめんな」

社長は嘉子の肩を軽くたたいた。

「ちょっと、やっぱりその話ですか？私はもういいよ、お父さんはお父さんでそういうお父さんだってあきらめているから」

「いやっ、違う違うんだ。それでよつちゃんの気持ちを少しでも早く和らげたいって思ってたな。この方は探偵の細谷さんだ」

細谷は腰掛けていたソファから立ち上がり、丁寧なお辞儀をした。

「だから何なんですか？私は別に社長に解決して欲しいとかそういう風にも考えないですし、私の気持ちを汲んで同情して欲しいなんて尚更思っていませんけど」

「よつちゃん、これは昨日の夜お母さんと話し合って決めたことなんだ」

社長はゆっくりと海が見渡せる大きな窓の方に歩いて行く。

「これから話すことはな、とても大切なことだから良く聞きなさい」

1
2

「実はな、会社の私宛にこんなものが届いていたんだ」

社長はスーツの胸ポケットから白い一通の封筒を取り出した。

「読んでみなさい」

嘉子は足早に社長の方に歩くと、封筒を右手でふんだくって、中を

開いた。するとパソコンで打たれた1枚の紙が三折りになって入っていた。

「MGTトラベル社長様 明日御社の手配した足許山旅行中に悲劇あしきよやまが起こります。免れたければ全て中止とすべし。7月1日 田中慶子」

「何これ」

嘉子は書かれている行き先と日付を見て、これが自分の提案したあの「つまらない旅行」のことだとすぐに把握した。

「なんでこんな大事なこと今まで言ってくれなかったの？てか警察にはちゃんと届けたの？」

「実は今までもこういうことがたまにあっつてな。旅行に行きたくない人からやライバル社からの嫌がらせだったりといういるな。今までは警察に届けていたんだが、調査の結果はいつもこういうった類の連中からのものだったという経緯があっつて、今回は特別何もしなかつたんだ」

「ちよつと・・・」

嘉子は手紙の最後の差出人のところに目が止まった。そして父のやり方に激しい憤りを感じた。

「しかも田中慶子さんって私のお客さんじゃないの、何で今まで私にも黙つてたの？」

「黙っていて悪かったと思つているよ。ただ事前に話したらよっちゃんがか心配するだけと思つてな。何も起きないもんだろ、普通さ」

「それに今更警察に実は事前にこんな手紙を受け取ってましただなんて話せないだろ。会社は事前にこういうった情報を得ていたにもかかわらず何も対策を取っていなかったなんてマスコミあたりに報道

されてみる。それこそ一大事だ。
我社の従業員は派遣社員を含めて千人だぞ。全員路頭に迷ったら大変だと思わないか？」

「大変だと思わなかったって言われても、大変に決まってるじゃないですか。ていうか今からでも警察に言うべきだと私は思いますけど。隠蔽していたことが発覚した場合の影響の方が大きいですから」

「まあ、そういうなって。この手紙は受け取っていないとすると決めたんだ。そう、お母さんとな」

嘉子は母親の名前を出せば自分が納得すると思っている父親が大嫌いだった。こみ上げる怒りを抑えて、自分のポリシーを曲げまいと必死に敬語を使う。

「ああそうですか。分かりました。一社員の私が社長に意見をしてすみませんでした」

「まあ、そんな怒るなよ、よっちゃん。それでこの細谷さんに来てもらったというわけだ。それでは佐野社員協力してくれるかな？もう君の上司には話を通してある」

「協力とはどういったことでしょうか？」

嘉子の素直な言葉とは対照的に、顔つきは依然引きつっている。

「つまりだな、警察の通常の捜査に細谷さんの独自の調査をプラスして行うことで、事件の早期解決を目指すプロジェクトということだ。早期解決すればそれだけ余計なところに捜査も及ばなくてすむだろう。よって佐野社員は今日付けでカウンター業務を外れて、秘書室付となる。」

「そんなの勝手に決めないでよ。何考えてるのお父さん？」

社長はシングルベッド程の大きさの机のイヤミな革張りの椅子に腰を下ろした。腹の辺りで指を組み、そしてしばらく沈黙した。

「よっちゃんのお客さんの田中慶子さんは何らかの事件に巻き込まれているってことじゃないかな。」

本人がこんな手紙出すわけないだろ？これは誰が見たって濡れ衣なんだよ。彼女は今暗い警察の取調室の中で、どんな気持ちでいると思う？」

「それは・・・」嘉子は気持ちと状況の整理を始めた。

「警察だって暇じゃないんだ。昔お父さんも脱税容疑で捕まったことあるだろ。結局すぐ身の潔白を明らかにして釈放されたけどさ。」

警察は犯人を捕まえるのが仕事であって、本当の犯人なんて彼らからしたらどうでもいいことなんだ。お父さんは今でもそう思ってるんだ。その時はよっちゃんにも迷惑かけたよな。だから今回この怪しい手紙を警察にも渡さなかつたっていうのもあるんだ」

「私だってお父さん信じてるよ。嫌なところだらけだけど、だって私のお父さんだから」

「じゃあ今回の田中さんの件も分かってくれたかな？よっちゃんの大切なお客さんと会社のためにな。よっちゃんもつらいとは思いますが協力してくれないか？」

「うん・・・いいけど。いやっ、分かりました」

「この旅行プランはよっちゃんが考えたものなんだろ。だったら一番状況が良く分かってるはずだし、それと細谷さんは若いがこう見

えてやり手なんだぞ」

ロングの髪に紺色の膝丈スカートが似合うきれいなお姉さんがニコリと嘉子の方を見た。

「嘉子さん、よろしくお願いします」
細谷は深々とお辞儀をした。

現場検証の旅

13、現場検証の旅

その週末の夜、嘉子と細谷は旅行プランに沿って実際に現地に行ってみることにした。現場検証といったところだ。

東京駅からは新幹線で長野まで行く。

今日はちよつど金曜日。

「金曜日ですから、車中でお酒を飲まれる方も多く臭いも・・・」
嘉子が田中慶子に提案したまさにその通りの状況が目の前にあった。通路を挟んだ隣の席では中年男性と若いホステスのようなカップルが腕を組んで寄り添っている。

「これはちよつとキツイですね」

細谷は小声でこぼした。

「ええ、つまらない旅行というか初っ端から最悪ですね」

隣同士に座る二人は視線を合わせ、軽く苦笑いをした。百聞は一見に如かずとはまさにこのことだ。アルコールの臭いにまぎれて時折、「いかさき」や「いかくん」の臭いが鼻下へ漂って来るのが誤算だった。

「それで早速なんですけど、私どもが把握している情報も嘉子さんに知っておいてもらった方が、というかいろいろご意見いただけたらと思つて」

「どんな情報ですか？」

「被害者の桜井和人ですが、女性関係が結構派手だったようなんです」

「社内の何人かにも手を出していたようで、ほら桜井和人ってなかなか顔がかっこいいじゃないですか、しかもかわいい子には過剰に優しくしてたようで」

「桜井さんって確かご結婚されてましたよね？」嘉子は田中慶子から聞いていた話を思い出した。

「要するに浮気ってことになるんです。その時当社はこちら案件をまだ承っておりませんでしたので、写真などでの浮気の証拠は持ち合わせていません。ですがカウンター業務の吉田真理子という同じ職場の方と頻繁に会っていたという情報はあります」

「そしたらその吉田さんめっちゃ怪しいじゃないですか？桜井さんが奥さんとなかなか離婚に応じないので、修羅場を向かえてしまったとは考えられませんか？」

「大いにあるとは考えています。ただ吉田真理子もアリバイがあります。なんせ一緒に社内旅行に参加してましたから」

「ですが動機から言って田中さんより怪しいですよ？吉田さんの人間関係はどうなんですか？」

「そこは今あたっているところです。吉田真理子に好意を寄せている男性などを中心にですが」

「そしたら警察が吉田さんと桜井さんの浮気的事实を突き止めれば、田中さんを釈放させられますか？」

「それは、分かりません。ただこの程度の情報は警察もすでに把握していると思いますけど。」

「ですが、お客様からの要望とあらば念のためタレこみさせていただきます」

細谷は携帯を取り出し何やら誰かにショートメールを送信した。

「はい、タレこみ完了いたしました。田中慶子が釈放されればいいですね。それともう一件」

「今度は何です？それとメールは警察に直接送ったんですか？」

「メールの宛先は申し訳ありませんが、当社の機密事項なのでお伝えすることは出来ません。」

それで桜井和人には1億円の保険金がかけてられました。受取人は彼の妻である桜井幸子となっています」

「保険の加入時期は3ヶ月前の4月です。よって桜井幸子が加害者である可能性も出てきます。」

「けど奥さんが旦那さんを殺すなんて・・・ご結婚されてお子さんもいたんですね？」

「実はさらに桜井幸子にも浮気をしていたという疑惑があります。息子の幼稚園の先生である角田元です」

「なんかもの凄くややこしくなってきたのですが」

「大丈夫です。弊社としては既に犯人の目星がついていますから」

そう言って細谷はパソコンを開いて何やらのデータの確認を始めた。そして嘉子は細谷から聞いた情報をもう一度整理することにした。今回の現場検証のために新しく購入した黒革のそれっぽい手帳に気付いたことを書き留めた。

嘉子と細谷が長野駅に到着したのは午後8時前だった。そして駅前ターミナルから旅館が手配した迎えのマイクロバスに乗り込んだ。長野駅前は地方都市とはいえ、ホテルやオフィスビルなど東京と遜色が無いほど栄えている。

細谷は送迎車が走り出すとすぐに旅館の名前が書かれた半被はっぴを着た運転手に話しかけた。

「7月2日におじさんとこの旅館に泊まった方が殺人事件に遭われたんですよね？」

「東京から来たあの旅行客のことですか？」

初老の男性は少しうっとおしそうに答えた。

「そうです、何か変わったところはありませんでしたか？」

「変わったことってというか、あの人たちにはあんまりいい印象は受けなかったな」

「何かお気に障るようなことがあったんでしょか？」

「いやーっていうかお客さん、あの人たちの知り合いかなんかなのかい？」

「実は同じ会社で働いている者です。今日は亡くなった桜井さんにお花をつけて思いました」

「そうかあ、気の毒にな。ただあの人たちはバスの中でもうそりやひどいことずつと言ってるな。だから良く覚えてるんだけどさ」

「えっ？」細谷は前のめりに運転席の方へ身を傾けた。

「なんでもよ、来るときの新幹線が最悪だとか、うちの旅館のお湯がぬるいんだなんて、もう節操も無く騒いで、さすがに俺もイラッとしたっつーか」

「イラッとしてどうされたんですか？」

「そんならうちに泊まらなくていいって言っちゃまったんだよ。けど

そしたら旅館の対応も最悪だなんて、逆にもっと盛り上がっちゃまってさ。人をバカにするのも程ほどになって思ってたよ。ほんと今の若い人たちってだよ」

「そうでしたか。すみませんうちの社員がご迷惑をお掛けしてしまっています」

「いやぁいいんだよ。あんたが悪いとかじゃないからさ。きっと政治とか教育問題とかいろいろあんだらうよ東京にはさ」マイクロバスは街を抜け街灯のない山道へと入って行く。

「それで他に気になることとかありませんでしたか？」

「気になることっていったら、あれだな。メガネかけた女の人がいじめられてるように見えたかな。なんでもこの旅行を計画したのが彼女みたいで、それで歌を歌えとか下手な方がいいとかさ」

「そうでしたか・・・」細谷はバッグから田中慶子の写真を取り出して運転手に見せた。

「そうそうこんな感じだったかな、もうすぐ旅館に到着だよ」

駅から15分位走ったところで、二人は旅館に着いた。何てことない2階建て一軒家のような建物が見える。旅館というよりは民宿と言ったほうが良いかも知れない。「ホテルマウンテン」とカタカナで木版の表札に書かれているのが、なんともいろいろと残念だ。

嘉子と細谷二人はフロントでチェックインを済ますと、時間も遅かったので、割烹着を来た旅館の従業員の勧めで部屋には行かずそのまま食堂で夕食をとることにした。早く食器を片付けて家に帰りたいとの事を直接言われた。

「田中さんいじめられてたみたいですね？」嘉子はクリームシチューをすすりながら向かいに座る細谷を見た。

「そのようですね。弊社の事前調査では勤務時間中のいじめなどは

無かったとの判断ですが」

「けど、態度とかちょっと酷くないですか？旅館の従業員の前で旅館をけなすようなこと言っただけですし」

嘉子はこう口にする、あまりのモラルのなさにイライラ度も増していくのを感じた。

「一ついえることは、嘉子さんはこの件に責任を感じなくて良いということです。この旅行が例えどんなにつまらないものだとしてもそれはお客さんからの要望に沿ったものですし、旅館の人に迷惑をかけたというのはそれとは関係なく会社の民度の問題だと思えますから」

細谷は嘉子の愚痴をこう一蹴すると、淡々とシチューをスプーンですくい上げた。うつむき加減で渋い顔をしているのは、これがあまり美味しくないためと推測できる。

一方嘉子は細谷の正論というか模範的な回答に何も返すことが出来なくなってしまう。おかげさまでイライラはどこかえに消えて行ったのだが、ただもう少し話に乗ってくれてもいいのになどと考えた。

しばらくして嘉子がデザートのスイカを食べていると、細谷は話を再開した。「この時間帯は食堂で宴会でしたよね？」

「そうだったと思います。というのもセクハラが蔓延してほとんどの会社で中止になっている昔の社員旅行のようなコテコテの宴会をご希望されていました」

「ちょっとその時の状況を聞いてみましょうか？」

細谷は近くにいた従業員と思われる50歳位の女中の方へ小走りに寄り、何やら聞き始めた。

5分程だろうか。細谷は席に戻ってくるなり、話の内容を嘉子に話

し始めた。

「どうやらその日のメニューは、カレーライスだったようです」

「カレーですか？そんなはずは、私は確かお刺身と鍋を手配しましたけど」

責任感の強い嘉子は自分のミスだったかどうか、空を仰ぐように食事手配時の記憶を遡った。

細谷は状況を悟り、優しい笑顔を嘉子に向けた。

「嘉子さんの手配ミスではないですよ。聞いた話ですが当日の朝にお客さんから直接連絡があったとのこと。急な変更だったから良く覚えているとのことでした。それとお酒はビールなしの日本酒の熱燗だけ出されたようです」

「カレーに熱燗ですか？それってどうかん考えても組み合わせが悪いですか？・・・もうすぐ夏なのに」

「つまり旅行の延長でしょうか？詳しいことは分からなかったのですが、午前10時頃女性の方からオーダー変更の連絡があったそうです」

「それで宴会の様子とかがって？そこでも田中さんはやはりいじめられていたのでしょうか？」

「宴会というか8時30分定時に皆さん集合されて、カレーライスを食べ始めたとのこと。お酒に手をつけた方も少なく、食事が終わるとその後皆さんバラバラに席を立たれていったようです。温泉に入る方もいれば、町の方へ出かけられた方もいたそうです。

それと宴会の雰囲気は良く覚えていないそうです。奥でテレビを見ていたとのこと。ですから宴会に田中慶子含め誰が主席していたのかすらちよつと分かりませんでした」

「それはそうと誰が夕食をカレーライスに変更したんですかね？普通は旅行会社を通してそういった変更するものなんですけど・・・」

「

細谷は携帯電話を開いて、何かを確認し始めた。

「どうやら田中慶子の会社から夕食変更の電話はかけられているようです。その日田中慶子は午前10時に出社してますから、彼女が自らメニューの調整をした可能性もありますね」

食事を終わると嘉子は1階にある大浴場へ向かった。

「はぁーほんと今日は1日いろいろなことがあったな」

5、6人入れば一杯になるだろう湯船に浸かりながら振り返った。

気になる点がいくつもあった。まずは旅行中に田中慶子が同僚からいじめられていたこと。嘉子は田中慶子と旅行の打ち合わせをする度に、徐々にはあるが明るくなっていったように感じていた。推測だが、今回の旅行のプランが社内ですべて受け入れられ、期待されたからなのではないのか？

そしてもう一つは夕食がなぜカレーに変更されたのかだ。コテコテの宴会の方がカレーライスよりも嫌がる社員は多いだろうに・・・。

「・・・ヘクシヨン」

寒い時期では全くないが嘉子は寒くなって来たので、考えても埒の明かない問題は諦めて、湯船から出ることにした。

ここの温泉は何といってもお湯がぬるいことで有名なのだから。

15

その頃東京では、警視庁捜査一課の三田刑事と林刑事が聞き込み調

査を続けていた。

「やっぱりダメか」

そう言うのと三田は乗用車のシートでタバコに火を付けた。被害者桜井和人の妻である桜井幸子のアリバイが取れたのだ。

「いやー被害者が死んで、保険金も入るし一番得するのが彼女なんですけどね」林が三田の隣でかつたるそうに口を開いた。

「こらっ、仏さんに死んだなんて言い方ないぞ。死んだ人にも敬意を払ってだな、亡くなったとかかってちゃんと見え」

「そういう三田さんだって死んだって使ってるじゃないですか」「なんだと・・・」

桜井幸子は事件当日の朝も通常通りの午前9時に息子を直接幼稚園まで届けた後、近くで午後1時までずっと奥様方とランチを楽しんでいた。ファミリーストロンの防犯カメラにもその模様はしっかりと映っていた。

「誰か共犯者がいたんじゃないですか？」林はそう言いながらおもむろに車内のサイドシートから身を起こした。

「そうか、それはあるな。で誰だ？」

「ほら例えば田中慶子とか、実は裏でこっそり繋がっていて保険金の一部を受け取る約束をしてたとか」

「なるほどな、確かにそれはあるな」

三田は林の考えに同調した。

「でしょ三田さん、俺凄くないっすか？天才？」

「偉そうにするな馬鹿。で天才的には次に何をどのように調べれば事件が解明される手はずなんだ？」三田は林のひらめきに感心しつつも、林については認めたくない部分も多々あるため、嫌味を込めて質問をした。

「そりゃー、聞き込みですよ。刑事は足っすからね」

「つてかちよつと待てよ、田中慶子は旅行に参加してたから直接は殺せないよな？」今度は三田が立場を逆転し勝ち誇った。

「じゃあ被害者を突き落とすのは誰ですか？」林は不満げに聞いた。

翌日の午前11時過ぎに、三田と林は田中慶子などが勤めている「フォーカストラベル」という旅行会社に向いた。被害者桜井和人が生前勤めていたところでもある。

また、林は昨日の夜に、桜井和人と吉田真理子が不倫関係にあったというタレこみを偶然にも入手していた。

デパートの5階にある店内にはカウンター窓口が5つ並ぶ。日曜日だからか、店内はごった返しているといった表現がちよつど良いだろう。カウンターの担当者はとても忙しそうに動き回っている。三田は店が忙しいのは承知で店舗の責任者に聞き込みの協力を仰いだ。事情聴取は各自時間をずらして取っている休憩時間中であればという条件で許可を受けた。

しかし何人かの社員から事情は聞いてはみたが、不思議と桜井と吉田の関係については誰も知らないとのことだった。

ただ興味深かったのは、意外にも桜井が逆に田中慶子に好意を寄せていたはずという声が多かったことだ。

情況としては普段部下の仕事にあまり興味を持たない桜井ではあったが、こと田中慶子のこととなると叱責したり、みんなの前で過剰に褒めたりと至るところでの反応が他と違ったらしい。

ちよつど小学生の男子が好きな女の子にちよつかいを出すような感じだったとのことだ。また会社の花見の席では集団から離れたところで、桜井が田中に二人きりで何かを迫っていたという情報も上が

った。総じて感覚的なものになるが、同僚から田中はあまり良くは思われていないようだった。

そうこうしているうち、吉田真理子の休憩の番になった。聞き込みスペースとした事務所脇の非常階段へと繋がる通路にカツカツと彼女は現れた。背の低いかわいらしい感じの女性だ。

「私は桜井さんとは何の関係もありません」

吉田の第一声はこうだった。三田はこちらから何も聞いていないにもかかわらずいきなり桜井との関係の話が上がったことに違和感を感じた。そして意地悪く吉田に聞いてみた。

「なぜ桜井さんとの関係についてこちらから聞いてもないのに話し始めたのですか？」

吉田はムツとした様子で反論した。

「そんなの刑事さん達がみんなに毎回この話ばかり聞いてるからに決まってるじゃないですか。そんな風に他のみんなに聞くとそういう噂ってすぐ職場に広がるんです。少しは私の立場とかを考えてくれませんか」

「それは失礼致しました」

三田はあくまで冷静に対応した。

「ただ、念のため申し上げますがこちらも好きで聞いているわけじゃないんですよ。というのももそうだったタレこみがありましたね」

「もう全く誰なのこんな根も葉もない事を言ってるの」

吉田は両手を脇の横に持ち上げ、困った様相をアピールした。

すると林はビジネス鞆に手を入れ一枚のA4の紙を取り出し吉田に

手渡した。

「これでも桜井さんとの間に何もなかったと言いますか？」

吉田の携帯電話の発信履歴だった。その脇には桜井へ送ったと思われるメールの内容も記載されている。

「いやー、こういつたものが私に匿名で届きましてね。警察としても調べれば分かることではあるんですが……。それで職場の皆さんにあなたと桜井さんのことを聞いていたわけなんですよ」

吉田は書類を目にするとあっけにとられた。「私は今日もベッドで一人、あなたは家族と……」という一文が送信時間と共にしっかりと印刷されていた。

「今回は桜井さんがお亡くなりになりご愁傷様です。まず我々はこういふべきでしたかね」

三田が吉田に迫っていく。

「これを見てもまだ、吉田さんは桜井さんと何も無かったとおっしゃいますか？」

「実は……」

吉田は観念したかのように腕を組み真相を話し始めた。

「私は刑事さんがおっしゃるように桜井さんを愛していました。けど殺してなんかいません。桜井さんが亡くなった時間は同僚とみんなでトンネル見学をしていました。これがアリバイです」

「アリバイは分かりましたが、他に気になることとか桜井さんに恨みを持っていた人とかに心当たりはありますか？」

「っていうか不倫って、人を殺す程のことですか？確かに私は当日

の夜に桜井さんと奥さんをドッキリで会わせる手配はしました」

「ど、どういうことですか？」

林は吉田の話があまりに突然だったので思わず聞き返した。

「だから、旅行の夜に私が桜井さんを誘い出したんです。彼がカレーライス嫌いなのを知っていて、それで旅館に直接電話して食事をカレーライスに変更してもらったんです。そうすれば彼は否応なしに夕食をするでしょ。」

そして私から彼には田中慶子の名前で駅前のホテルを予約していると耳打ちしたんです。チェックインをして部屋で待つようにと。

私は桜井さんが田中慶子とも付き合っているのも知ってましたから」

「すると吉田さんはあなたから田中慶子の名前を出せば、桜井さんが当日田中慶子とどこかに消えてしまうことなく、重要な案件だということを知った上で、一人でホテルに来ると踏んでいたわけですね？」

「踏んでいたという表現が合っているかは分かりませんが、私とは奥さんと離婚を前提に浮気をしていながら、さらにもう一人と浮気をするなんてホント人間のクズだっと思ったんです。こんな男と不倫してた自分が惨めで悔しくて・・・」

「それは壮絶な三行半のつけ方ですね」

吉田は更に話を続けた。開き直っているというか、堂々とした態度には関心を得る。

「それで、えつと悔しかったんで・・・。ただ私は三行半をつけてはいません。ホテルの部屋には桜井さんの奥さんが向かうことになっていました」

「それで桜井さんの奥さん桜井幸子さんはその日長野まで行ったんですね？」

「それは知りません。」

「えっ、でも一緒に計画をされてたわけですよ？」

「私にとっては、その後のことなんてもうどうでもいいんです。桜井が奥さんから別れを告げられようが、慰謝料を請求されようが。ただ酷い別れ方であればあるほど良いとは思ってましたけどね。」

「すみません、もういいですか？」

吉田は刑事達にこう言つと、一礼をしてまた職場へ戻って行った。

三田と林は吉田真理子の壮絶な復讐の方法にあっけにとられ、不倫などするものではない。これが二人の刑事の出した共通の感想だった。

林はノートに書いた聞き込みから取ったメモを見返していた。

「いやー最近の貞操というか、女性は恐ろしいですね。」

「もしこの証言が真実だとしたら桜井もホテルでは散々な目にあつたことだろうよ。けどな、自業自得って言つたらまあしょうがないような気もするけどな。」

二人は上司に聞き込みから得た状況を報告し終わると、再度被害者桜井和人の妻である幸子に会いに行くことにした。当日長野駅前のホテルに行ったかどうかを確認しなくてはならない。

幽霊トンネル

16、幽霊トンネル

その日の朝、嘉子と探偵の細谷は旅館の1階で朝食を取っていた。朝食といってもトーストと目玉焼きに簡単なサラダだった。

窓からは「高圧危険」と書かれた高さ3メートル程のタンクと、以前使用していたと思われるペンキが所どころはげた赤茶色の小屋が見える。

昨夜は時間も遅かったので眺められなかったが、ここからの景色は殺風景という表現が好ましいだろう。

「タンクを何かでちよつと覆い隠すだけでも、朝食の雰囲気はマシになるだろうに・・・」

嘉子は昨夜の温泉の湯温に続き、再度ホテルマウンテンの質に疑問を感じた。

「あのタンクでお湯を沸かしているんでしょかね？お湯がぬるいのもあのタンクのようなボイラーの燃料をケチっているからでしょうか」

細谷は自説を嘉子につぶやいた。どうやらこの一帯に温泉が湧いているのは確からしいが、湯の温度が摂氏30度程度であるために、ボイラーで一度沸かす必要があるとのことだ。

「ごちそうさまでした」

こうして食事を終えた二人はチェックアウトを済ませた。つまらない旅行のスケジュール通りにフロントで9時半を待ってから、タクシーで旅館から幽霊トンネルまで向かった。

トンネルには10時15分に到着した。
なんてことはない。長さ30メートル程度の2車線のトンネルだった。

スプレーでの落書きがやはり気になる。あたり一面に誰を殺すや犯すとか、何月何日に誰々が参上したなどが書かれていた。

トンネルの落書きに事件と該当するものがないかを念のためチェックした後、細谷は嘉子に確認した。

「このトンネルって昼間も幽霊が出るんですか？」

「三流雑誌にそう載ってたんです。但し確か夜だったと思いますけどね。」

昼に来るからつまらなさが倍増する予定でした。なんでもこのトンネル付近で殺された人がこの世に未練があるらしくて。1970年代だったと思うんですけど、三角関係のもつれから男が彼女に殺されたとかで」

嘉子は落書きをぼーっと眺めながら細谷に説明した。

「それって、今回のケースにそっくりですね、幽霊の彼女は保険金を手に出来たんですかね？」

細谷はさりげなく一人言うど、嘉子の返答を待たずしてトンネルを抜け山道を奥へ上っていった。

嘉子も細谷の後を付いていく。トンネルから150メートル位は歩いただろうか。「あの細谷さん、桜井さんが落ちた現場ってこの近くなんですか？」

「ここだと思いますよ」

そう言っつて細谷は足を止めた。ガードレールがちょうど途絶えてい

る場所に熊出没注意と書かれた看板が立っている。ただし、当然この看板にも落書きが施されており、「熊」ではなく「変態」と修正が加えられていた。

「ほら、この下、見えますか？花束があるでしょ？」

嘉子は細谷の腕にしがみつきながら、恐る恐る崖の下を見下ろすと、確かに花束が見えた。

「ここで桜井和人は何者かに突き落とされたか、もしくは自分でうつかり足を滑らせて落ちたか、自主的に落っこちたということ間違いないと思います」

「細谷さんも事件の真相ってまだ分かってないんですか？」

「昨日もお話したとおり大体的見当はついてます」

「じゃあ一体誰ですか？田中慶子さんではないですよ？だってほら団体でこのトンネルまで来てるから、それがアリバイだと思うし」

「そうですね。ポイントはなぜ入社8年目の田中慶子が急にいじめられるようになったかと、嘉子さんが言うように最近徐々に明るくなってきたかです」

細谷は悟ったように嘉子に答えた。

「すみません細谷さん、良く分からないのですが。田中さんが明るくなったのは、みんなから自分で立てた「つまらない旅行」プランが面白いと高評価を受けたからじゃないんですか？」

「だとしたら長野駅から旅館までのバスであのようないじめをされるわけがないですよ。すなわち同僚から何かしら気に食わないと思われていたと推測されるべきです」

「べきですって言われても私探偵でも刑事でもありません」
嘉子には不思議な怒りがこみ上げた。実際探偵でも刑事でもないが、プライドを傷つけられたような気がした。

「すみません言葉尻失礼しました。正直に話しますと我々の調査では田中慶子も桜井和人と不倫関係にあったとつかんでいます」

「田中さんですか？」

嘉子は田中の容姿がとて不倫などをするように見えなかったため、声が裏返ってしまった。また自分の周りにもテレビドラマでしか触れたことのない不倫が存在していた現実も彼女には衝撃的だった。

「そうです。少しがっかりされたかもしれませんが、それで同僚からの風当たりも強くなり……。ただ田中慶子個人は不倫とはいえず恋によつて徐々に明るさを取り戻したと考えています。」

要するに話はこうだった。

最近田中とも不倫関係を始めるような前向きな人生を歩む桜井が自殺する理由や、わざわざ旅行2日目に団体から外れて一人でトンネルに行った理由は誰かに呼び出された以外考えにくいというものだ。また桜井を呼び出した人と殺害した人が別であったかもしれないが、殺害現場を調べても証拠は今のところ何も無い。

いずれにせよ社員達はトンネルで常に一緒に行動をしていたとの裏づけがあるため、実際の殺害に吉田真理子が加担したことは考えにくい。ただ殺害現場までの呼び出しに加担していた可能性はあるとのことだ。

「ところで嘉子さん、桜井和人が亡くなって得をする人は何人思いあたりますか？」細谷は今度はなんちゃって探偵のプライドを傷つ

けないように、自分の意見を言う前に先にお伺いを立てた。

「3人だと思います。一人は桜井和人の奥さん幸子さん。旦那がいなくなれば保険金がもらえますからね。それに旦那の浮気のことも知っていたでしょうし、というのも何かの証拠はなかったとしても、最低でも女のシックスセンスで感じていたと思います。」

それに彼女も幼稚園の先生の角田さんと浮気をしてたんですよ？ ひよっとしたら逆に幸子さんの不倫が桜井和人さんにバレていて、逆に彼から離婚プラス子ども親権を迫られていたとも考えられますよね？」

「嘉子さん。いい線いってますね、後の2人はちなみに誰ですか？」

「後は、桜井和人の浮気相手の吉田真理子さん。桜井和人が奥さんとなかなか別れてくれなくてそれでって考えられますよね。」

それと最後は角田さん。彼は桜井和人がいなくなれば、奥さんの幸子さんと幸せになれますから。しかも保険金の1億円付きですしね。」

「田中慶子が犯人である可能性が非常に低いことがお分かりになったようですね。」

「ほんと良かったです。けど田中さんが例えば誰かに殺人を依頼したなんてことはないのでしょうか？」

「桜井和人が亡くなって田中慶子が得をすることってなんでしょうか？ましてや予てからの吉田真理子とは違って、つい最近桜井と不倫関係になったばかりですから、桜井への愛情も殺意を抱くほどの深い段階に達してはいなかったと考えます。よって奥さんと別れるかどうかでモメるには少し時期早々と思っています。」

「となると・・・」

嘉子は頭が混乱してきた。

「えっと・・・だから田中さんは桜井さんが好きだったから殺す理由は無いわけで・・・」

嘉子のはっとした。当初の自身が捜査に加わった目的を思い出した。

「というかどうしたら田中さんを釈放させること出来ますか？」

「また警察にタレ込みますか？」細谷はニヤリと嘉子の方へ顔を向けた。

「おそらく警察も既に把握していると思いますが、昨日は吉田真理子の不倫でしたから、今日は角田元と桜井幸子の関係をいっちゃいますか」

そういうと細谷は携帯電話を鞆から取り出し何やら打ち始めた。

「タレこみ完了いたしました」

17

嘉子と細谷は殺害現場の崖を下り、桜井の死体が横たわっていた谷底を念のため一通り見ることにした。辺りの岩にはわずかではあるが茶褐色に染まっているところがあった。

細谷曰く桜井の死因は崖下の岩に頭を強く打ち付けたことによるものらしい。他に外傷も見当たらなかったとのことだ。

結局ここでは何一つ新しい証拠は手することが出来なかった。

「この後ちよつと行きたいところがあるのですが」細谷は言った。

「というのもトンネル以降の現場検証は不要と考えています。既に

事件が起きた後のことですからね。他に気になるところがあるんですが、行ってもよろしいでしょうか？」

「登ったら民家のある山には行かないってことですか？足許山って名前だったかと思うんですけど」

「そうですね。それよりも長野駅前のホテルに事件前夜田中慶子という名前で誰かが宿泊されてたようなんです。田中慶子かもしれませんが、他の誰かが故意に彼女の名前を使用したのかをちょっと調べたくて」

嘉子は足許山には少し行ってみたい気もしたが、結局待たせてあつたタクシーに乗り込み、駅前へと向かった。タクシーを待たせた理由はタクシーの運転手曰く、観光地でもないここでは流しのタクシーが拾えないとのことだからだ。また駅前タクシーはメーターが近距離用に設定されているため、ここまで迎えには来てくれないとも言っていた。

二人は駅前のホテルは12時前に到着した。

細谷は髪を後ろでまとめた制服姿のフロントの女性に、黒い手帳のようなものをさっと見せ会釈をした。すると女性は急に畏まったように見えた。

ビジネスホテルといった感じで、フロントの前には談話用のテーブルが一つだけ置かれていた。

「お忙しいところすみません、この人たちに見覚えはありませんか？」

見せたのは田中慶子、桜井夫婦、吉田真理子、角田元の顔写真5枚だった。

女性はじつと写真を見ている。

「すみませんがちょっと覚えていません」

「それでは、こちらのホテルに監視カメラはありますか？」

「あつ、そうですね。それでしたらこちらへどうぞ」

女性に案内され二人はフロントの奥にある部屋に通された。嘉子は女性がやたら親切に対応をしてくれるのが気になった。

「7月2日の夜なのですが」細谷は女性に指示をすると、ホテルの責任者と思われる40歳位の髪がガチガチに固められた男性を呼んできた。

そして男性は細谷の隣にあつた移動式のイスをパソコン画面の方に寄せ、マウスを使って監視カメラの履歴を検索し始めた。

「うちのカメラは入り口にしか設置してないんですよ。ちょっと経費の関係もあつて、すみません」

嘉子と細谷は客が入ってくる度、監視カメラの再生画面を一時停止し細かく覗き込む。

「あつ、この人」

嘉子は桜井和人らしき人物を見つけた。時間は午後10時30分だった。

「あれつ、一人で来ましたね。もう少し状況を見てみましょうか？」細谷はいたって冷静だ。

そしてしばらくすると、帽子を深くかぶった田中慶子らしき人物がカメラ脇に写った。午後10時45分。ホテルに入るなりフロント

には行かず直接エレベーターの方へ小走りに通り過ぎていった。そして1時間15分後の午後12時、やはり一人で今度は玄関方面へゆっくり歩いて行くのが見えた。

「桜井和人は出てきませんか？」

すると男性ホテルマンが状況を説明し始めた。監視カメラのパソコンデスクに広げられた5枚の写真を見て何かを思い出したようだ。

「この人は多分翌日の朝チェックアウトされましたよ。」そう言うのと立ち上がって、一旦フロントに戻り何かを持ってきた。

「ほら、これは当日の彼の宿泊カードですが、実は私はその日のごとく覚えているんです。私はこの日夜勤でフロントに立っていたんですけど、この方ワインを3本も頼まれましたね。ここって、ビジネスホテルじゃないですか。ワインを頼む方って実際ほとんどいらっやらないんです。ただホテルとしては念のために欲しいとおっしゃる方のために在庫は持つようにしてるんですけど」

「それでチェックアウトの時はお一人でしたか？」

「そうですね、大体朝の9時過ぎだと思えますよ。ちょうど私の夜勤も終わる時間だったので。お一人でなにやら慌てた様子でチェックアウトされて行きました。」

それでタクシーを呼んでくれといわれましたので、駅前にたくさん止まっているのでそちらを利用していただいた方が早い旨をお伝えしました。

女性の名前ですから明らかに彼ではありませんが、田中慶子という名前で予約されてます、ほら」

そう言っって宿泊カードを細谷に差し出した。

細谷は連絡先の電話番号を手帳に控えると、席を立つ準備を始めた。

「すみません、何か事件でもあったんでしょうか？」フロントの女性がとつさに声をあげた。

「そうですね、聞き込みの背景について何も申しあげていませんでしたね。実はこの日彼がチェックアウト直後に近くの崖から転落され亡くなりました。ご協力ありがとうございました」

女性はきよとんとした顔をしたまま、動かなくなってしまった。

桜井幸子

18、桜井幸子

空は灰色の下、嘉子たちは並んでホテルから駅に向かう。

嘉子は細谷にぼやいた。「なんか分からなくなってしまったんですが」

「何がですか？」

「いやですから、田中慶子さんが実際にホテルで桜井和人さんに会ってたじゃないですか？」

「それでどうしました？」

「どうしましたって、田中さんはここで桜井さんと不倫をして、それで他の同僚にバレないように、別々にチェックアウトして……。けど桜井さんは翌日の朝までにホテルに戻って合流するわけでもなく、一人でトンネルに向かったわけですよね？」

細谷はニヤリとし嘉子の方を見た。

「防犯カメラに写っていた女性は、ほんとに田中慶子さんだったんでしょうかね？」

「どこかで旅館が手配してくれたお弁当を食べて、東京に戻りましょうか」

「あっ、そういえばちょっと聞いてもいいですか？さっきフロントに見せた黒い手帳ってあれって警察手帳ですか？」細谷は頷いて鞆

からおもむろに手帳を取り出し、嘉子に見せた。

嘉子が中を見ると警官姿の男性の証明写真と共に、
- 警視庁捜査一課林健二 - と名前が書かれていた。

「この人って・・・ひよっとして！」

「拾ったんです」細谷はそう嘉子に伝え、軽く微笑む頃長野駅は目の前にあるところまで来ていた。

その頃東京では三田と林は桜井幸子宅のリビングで紅茶をご馳走になっていた。湾岸の新築マンションの一室の目立つところに桜井和人と子どもの3人仲睦まじい写真立てが置かれていた。

「すみませんね何度もおじゃましてしまって、この度はご愁傷様でした」三田はソファに座りながら挨拶をし、線香をあげさせてもらった。

「こんな時にすみません。それでお忙しいと思いますので早速本題なのですが、フォーカストラベルの吉田真理子さんご存知ですよね？」三田は幸子の反応をじっと観察した。

幸子の目は辺りをさまよい始めた。そして右手で持つティーカップをテーブルの上に置いた。そして一呼吸を置いた。

「一度お会いしたことがあります。」

「それだけですか？」

「いえ、主人が亡くなくなる前日の夜ですが彼女の手ほどきを受け長野で主人に会いました。」

吉田さんは主人と不倫関係にあったそうです。というか私も主人の不審な行動から、誰かと不倫をしていること自体は分かっています

た」

「そうでしたか」三田は紅茶を啜った。

「ところで何をしに長野まで行かれたんですか？」

「浮気の真相を突き止めようと主人に会いに行きました。吉田さんが場を手配してくれて。というのも聞いた話でもう一人吉田さん以外の人も主人と浮気をしていたとのことでした。田中慶子さんという名前だったと思います。その人の名前でホテルを予約していると言われました。何故彼女の名前で予約したかは良く分からないのですが、主人をホテルに確実に呼び出すためとのことでした」

「それで7月2日の夜、ご主人にお会いになったわけですね」

「そうです。長野までは新幹線で行きました。そして主人にホテルの部屋で直接会って、突然の訪問でしたから主人ももうそれは本当に驚いていて、すぐに土下座をされました。

それで泣きながら謝られて……。いろいろ話していくと私の怒りも少し収まって、結局しばらく考えさせて欲しいと彼には伝えてホテルを出ました」

「失礼ですが、離婚をされるつもりはなかったんですね？1億円の保険金をご主人にかけられていて、受取人があなたになっていきますから」離婚によって保険金が受け取れなくなる可能性がある。

三田は鋭く幸子を見つめた。リビングは凍りついた。

「保険金は主人からの要望でした。万が一のために他の家庭もみなそうしているからとの理解です。ただ保険加入手続きは私の方でやりましたから、刑事さん達が私を疑っているのもわかりません。ただ私は主人を殺してはいません。確かに長野には行きましたけど、亡くなった時刻は東京にいましたから」

「つてことは・・・」三田は髪の毛を指で梳かしながら、少し状況を整理した。

「そうなるかと奥さんが長野にいる間お子さんはどうされていたんですか？」

「無理言つて子どもが通う幼稚園の先生に家でみてもらっていました」

「それはおかしいでしょう？先生だって就業時間外まで子どもを見る義務なんてないと思うのですが」

「いえ、角田元さんというのですが、凄く教育熱心な方で。お願いしてしまったこと自体はあまりよくないことと私も思っています。ただ、細かい内容までは話していませんが、特別な理由があつたと伝えたら、快諾してくれたんです。

うちの子も先生によく懐いていますから、喜んでいましたし・・・」

「そうですね」三田はどうしても角田元が子どもの面倒を幼稚園以外でみてくれたことが腑に落ちない。角田元という先生に謝礼を払ったのか、それとも・・・。

「奥さんは角田さんとどういった関係だったんですか？男女の仲になってたというタレ込みが届いているのですが」三田を差し置いて林は携帯電話の画面を開いた状態で幸子に手渡した。

ハッキリと写っていたのは幸子と角田が手をつないでラブホテルに入っていくところの写真だった。

「これをどこで？」

「街頭に設置されている防犯カメラです。一昨日の木曜日のもので。ほら、渋谷は犯罪が多いですからカメラも多いというわけです。

ですので念のためもう一度お伺いいたしますが、本当のお二人のこ

関係は不倫関係ということでもよろしいですね？」

幸子の携帯電話を持つ手が震えている。彼女の電話の画面を見る眼球は、焦点が定まっていないうように見える。

三田は横に座る林にこそそ耳打ちした「お前これどこで入手したんだよ？ 捜査令状なしに防犯カメラの映像使ったのバレたら始末書だつて知ってるのか？」

林もこそそと返した。「だからタレこみだつて言ってるでしょ」「タレこみつつたつて、こないだの携帯の通話記録といい、こんな非法なタレこみの乱発が上にバレてみる、俺達謹慎だけじゃすまないかもしれないぞ」

三田さんいっすから……。そういつて林は三田の両肩を抱え持ちソファ―に落ち着かせた。

幸子は頭を抱えている。そして事情を話し始めた。

「これから話すことは子どもと警察に關係のない人には話さないつて約束してくれますか？」

「はい、私達から状況を言いふらしたりということはありません。我々にも規定がありますから。捜査に必要なことは確実に話しません」

それでしたら。というと彼女は話を進めた。

「私と角田さんとはそういう關係なんです。写真にある通りです。ただ、私も主人が吉田さんと浮気をしていることを前から知っていました。」

ですから先日吉田さんから電話がかかってきた時は、きつと主人と別れて欲しいとの内容だと思いました。

ただ話して行くとそうではなくて、今までの主人との不倫の謝罪と、田中慶子さんの不倫のことでした。」

「以前から私は何度も主人に浮気の事を提起したいと思っていました。出来ないでいたのはちゃんとした証拠が無かったからです。主人はざる賢いところもありますから、きつと証拠もないのに話してもシラを切るだけだと思っただけです。それでは不倫を止めさせることも出来ませんし、逆に主人から私の不倫の話を持ち出される危険性もありました」

「要するにご主人とは不倫のことを話し合いたかったが、証拠もなくなかなか踏み出せなかったということですか？」

「そうです。不倫をしているとはいえ主人は私の主人ですから、一度愛した人ですし、子どものこともありますから、昔の関係に戻ればという気持ちもありました」

「ですが一方ご主人を殺害すれば、1億円も手に入るし角田さんとの関係もご結婚というステップへ発展させられたわけですよね？お子さんも懐かれていますようですね。何よりあなたはご主人を恨んでいた」

幸子は身を乗り出して反論した。「いえっ、私は主人を恨んではいません。あの日だって長野に行った理由は、しっかりお互いが不倫をしていることを認めあえる環境だったからです。その上で前向きな話があったんです。本当にそれだけです。」

長野で主人は今までの経緯を謝ってくれましたし、子どもの事を考えてやり直せないかとそういった話をしたんです。

ですが実際に関係を修復出来るとなって逆に今度は私が、二人の今後についてもやもやし始めてしまいました。それでその日は結論を出さずにタクシーでとりあえず東京まで戻ることにしました。子どもも角田さんに任せっきりというのも気にかかってましたから」

二人の刑事は桜井家を出た。

オートロックのマンションのロビーを出たところで三田は両手を広げ大きく伸びをした。

「おい林、全く状況が分からなくなったぞ俺は」

「ですが角田と幸子の関係は裏が取れましたよね」

「それはそうだけどさ、お前さっきのタレこみ何処から入手した？タレこみをして得をするのが誰かってことだよ」

「それはそうですね。俺は田中慶子を擁護する人からだって思ってますけどね。けど誰かは俺もわかりません。携帯には+009から始まる怪しい番号から情報が届いただけですから」

ほらっこんな感じですから……。

林はタレこみメールを三田に見せながら乗ってきた車に乗り込んだ。

「けど桜井幸子は和人に殺意を持ってなかったって言うてましたよね？」

「そうは言ってもな、保険金1億だろ。説得力に欠けるといつか怪しいよな。けど幸子には犯行時刻にアリバイがあるし、そうなるとう桜井和人を殺るために角田に依頼した可能性が高いな」

「三田さん、刑事は足つすよ」

林は元気を取り繕い、三田を奮起させた。

「よしっ、それもそうだな」

二人は角田元の勤める幼稚園に行くことにした。

幸子は刑事が去った後、角田に電話をかけた。なかなか繋がらない……。もしもし「角田の声が聞こえた。

「私しゃべっちゃった。」幸子の第一声を聞いた角田はすぐに声が動揺しているのが分かった。

「えっ、ちよつと待って、人のいないところに行くから」「そう言う
と逸って角田は幼稚園の教室から出た。」

「ごめん、それでどこまでしゃべった？」

「元ちゃんと不倫してるって、ごめんなさい」幸子の声は涙声にな
っていた。

「大丈夫、まずは落ち着こうよ。不倫してたことはきつと幸子が話
さなくてもいずれ分かったことだと思うよ」

「なんか私達がホテルに行くところ、防犯カメラに写ってたみたいな
の」

「そうか……。それで話した内容ってほんとにそれだけなの？俺
が長野に行く予定だったって話はしたのかな？」

「それは話してないよ。ただ必死に話したから、何かを隠してるっ
て気付かれているかも」

「うん、分かったよ。ちよつとごめん、子供達また寄って来ちゃっ
て。うるさいからまた後で電話する。じゃあね」

幸子の電話からは角田の声に混ざって「角田先生彼女と電話してる
の？」などという冷やかしの声が聞こえてきていた。最近の子供達
は如何せんマせているのが常なようだ。

角田元

19、角田元

桜井幸子宅から角田元が勤める幼稚園までは車で1分とかからなかった。高層マンションの1階に教室があり、目の前には300平方メートル程度の芝生の園庭が見える。三田が子供の頃とは違って、多種多様な遊具がフェンス越しに並べられている。

二人の刑事は外から中の様子を伺っていた。50人程の赤と白の帽子を被った子供達のはしゃぎまわっている。

その中に角田元が子供達と遊んでいる姿があった。人気者と思われる彼は3、4人の子どもから全身にしがみつかれて身動きが取れなくなっている。

三田と林はこの状況から、しばらく車の中で待つことにした。さすがに園児達の時間を奪ってまで事情聴取とはいけなかった。

1時間ほど待っただろうか、園児達が園舎から出てくるなり元氣良く送迎バスに乗りこみ始めた。同時に近所に住んでいると思われる奥さま連中は直接自分の子どもを迎えに校門のあたりに集まり始めた。その中には桜井幸子の姿もあった。

幸子は子どもに父親の死の事をどのように伝えているのだろうか？それともまだ伝えてはいないのだろうか？三田は明るい子ども達の姿を見ながら少し感傷的に思慮した。

最後の園児が園を離れたところで、校門で子供達に明るく手を振る

角田元が見えた。

「すみません、刑事さんですよね？」

すると肩まである髪が特徴的な24歳位の男性が刑事の待機する車に寄ってきた。角田はついさつき幸子からの電話があつたことは隠しきれないと思った。逆にしらばっくれることで無駄に注視されることを恐れていたからだ。

「先ほど桜井幸子さんから一通りの状況は聞きました。ここではなんですので」と言つて二人を園舎内の誰もいなくなつた教室へ案内した。

「どうぞ」といつて差し出されたのは高さ30センチもないであろう子ども用のイスだった。そしてそのイスに合つた高さの長机に向かい合う形で話を始めることになった。

「それで、すみません唐突で。どこまで桜井幸子さんから話を聞いているかを教えてもらえますか？」

角田は物怖じせず、手を所狭しと且つ礼儀正しくひざの上に乗せしつかりとした口調で答え始めた。

「私は幸子さんとは不倫をしていました。ただ私達が会うためには、私が幼稚園を休まなければなりませんので実際は何回かだけの関係だと思います。幸子さんが園の行事のお手伝いを積極的にされていたことから次第に仲良くなつていった感じです」

「そんな堂々と仲良くなつたと言われても・・・、相手はご主人も子どもも居たわけですよね？」

「良く分かつてはいるつもりです。先生という立場ですから尚更と
いうのも分かつてはいるつもりです。ただ、冷静になつて関係を考
えるきっかけもありますでしたし、というか会えばいついとい

った感じですので」

彼は悪びれた様子を刑事達には全く見せなかった。

少しは反省をするものとはかり思っていた三田の予感はずれた。三田は横に座る林を見た。彼も彼なりにこの男の態度に苛立っているのか、鋭い目で角田を見据えていた。

「それでは率直に聞きますが、7月2日の夜のことですが覚えていますよね？幸子さんのお子さんの面倒をみられた日ですが？」

「ええ覚えています。確か急用が入り、どうしても行かなければならない場所があるとかで」

「その日幸子さんは何時頃自宅に戻られたか覚えていますか？」

「確か翌日の早朝5時頃だったかと思います。帰って来たときは私はソファアのリビングで寝てましたので、確かには覚えていませんが。」

彼女は時間も遅くなり新幹線に乗れなかったので、タクシーで帰ってきたようなことを言っていましたから、タクシーの履歴を追えば大体の時間が特定出来るとは思いますが」

「ちょっと待つてください。となると角田さんは不倫相手の家に堂々と上がりこんだわけですよね？お子さんも5歳ですからもう情況判断能力というか、幼稚園の先生、しかも男性が家に泊まりに来た事をご主人に話してしまいうリスク高いですよね？」林が声を大きくして何かに気付いたように聞いた。

「そうです、私が最初幸子さんからの依頼を渋って受け入なかった理由がそれです。例えご主人が当日の夜に帰って来なかつと、翌日もしくはいずれ子どもが父親にこのことを話すでしょうからね。そうしたら私が幸子さんといいい仲だと間違はなくバレます」

角田は相変わらず堂々と受け答えている。その態度が三田には不倫

を正当化しているようで気に食わなかった。

「しかしそれでも依頼を受けていらっしやるわけですよね？」

「そうです。というのもその時謝礼を貰ったんです。

言わなくても刑事さん達は知ることになるでしょうから、今言いますけど3万円です。幼稚園の先生ってボーナスも少ないですし、ちよっと目がくらんでしまいました」

「とんでもない話ですね。子どもに確実に悪影響であるにも関わらず理性を失って目の前の既婚女性だけでなく、金にまで目がくらんで」

「刑事さんが何とおっしゃろうと、私はそういう者ですから」

「確かに、それは個人の自由とは思いますがね・・・」

三田は強烈な嫌味にもあっけらかんとした先生の態度が、尚更気に食わなかった。

「それで7月3日はどこで何をされてましたか？」

「その日はお遊戯会の下準備をするため、朝の7時には桜井さんのご自宅を出てすぐ園に向かいました。あ、それで近くの牛井チエーンで軽く朝食をとり、園に着いたのは7時半頃だったかと思えます」

「だれか証明出来る方はいますか？」

「はい、園長含めその日は全先生出勤でしたから」

「分かりました、ご協力ありがとうございました。後はこちらで確認をさせていただきます」

「それで・・・、幸子さんとは今後どうするおつもりですか？お子

さんも先生に懐かれて、ご主人も亡くなってますけど」

「それはまだ考えていません。ただ、さっきも言いましたけど幸子さんととはたまに会うくらいの関係ですから」

そうして角田は刑事達を職員室へ案内すると、また来た廊下を戻って行った。

三田には気がかりなことがあった。果たして幼稚園の先生がこんなにも乱れているものなのかどうかだ。子供達とあれほど楽しそうに過ごしていた角田が、どうしても人妻と不倫する男には見えなかった。そう信じたいという気持ちがあるのかもしれない。不倫をすれば教え子に迷惑をかけることになる。悲しませることになることくらい誰にでも分かるはずだ。

導き出された答は角田の幸子への想いは遊びではなく本気だったということだった。

彼の堂々とした対応が全て嘘だったら……。幸子の夫である和人と教え子が同じ家庭に居ることが許せなかったのではないか……。だとしたら……。

林が脇で園長先生などに殺害が行われた7月3日の角田に、いつもと違うところがなかったかを聞いている。

そうして三田が思慮を巡らせていると、園長先生の机の上に置かれていた教員達の出勤簿に目がいった。

彼は片手でそれをあさりながら角田元のものを無造作に探し当てると、7月3日の欄に修正液の跡が残されているのを見つけた。

この園の出勤簿は出勤した日に斜線を引くことになっている。

7月3日には斜線が引かれ、最終的には出勤とはなっていない。三田は指の爪で修正液の跡をこすった。すると丸が現れた。丸は欠勤

を意味していた。

また過去の出勤欄に目を移すと、角田が一月に2、3回は有給休暇を消化しているのが分かった。

先月で年間に付与される有給休暇は全て消化し終わっていたのだ。

よって今月からは有給休暇ではなく欠勤を使用し、しかも引き続き同じペースで幼稚園を休んでいた。

探偵との別れ

20、探偵との別れ

翌日田中慶子が釈放されたことを、嘉子は細谷から聞いた。

嘉子は平日の昼前のオフィスビル、MGTトラベル事務所の社長室にいた。秘書室付の社員として特命を受けている彼女は、上長であり父親でもある社長から出張報告を命じられていた。細谷も同席している。

「まずは田中慶子さんが釈放されたそうじゃないか。おめでとつ、よつちゃん頑張ったんだな」

社長からの労いも嘉子には上の空だった。革張りの応接セットに浅く腰掛け、テーブル上の生けたばかりと思われる短く切られた紫陽花を見つめている。

「おい、よつちゃんどうした？お父さんまた何か気に障るようないこと言っただけかな？」

心配そうに嘉子を見つめる目は父親のまなざしだった。細谷が肘で嘉子揺さぶると、はっとしたように全く話を聞いていなかった自分に気付いた。

「あつ、すみません。ちょっと気になることがあったので」

「田中慶子が釈放されてまずかったですか？それでしたら警察へはまた何かしらタレこみますけど・・・」

「いやそれは大丈夫です。ただホテルのロビーの防犯カメラには田中慶子さんらしき人が写ってて、けど細谷さんのおっしゃる通りそれは「らしき人」なんです。姿も白黒でぼやけていて、ただ背の低

い女性というのはわかるんですけど。それで更にはその人が本当に桜井和人さんの部屋に入ったのかどうかは証拠もないんです」

「要するに具体的に誰がその夜桜井和人に会いにホテルに行ったかも分からないし、そもそも彼の部屋に入ったかどうかも分かっていないということかな？」嘉子の考えをまとめるように、社長はやさしく聞いた。

細谷も嘉子をサポートするべく聞いた。「じゃあ何故桜井和人は翌日の朝タクシーで旅館ではなく直接トンネルまで向かったと思っっていますか？」

「それは、同僚と合流するためか誰かに呼び出されたかだと思えますけど、合流する予定であれば、皆が止まっている旅館に戻ればいいことだと考えています。当日朝寝坊でもしなければですが」

「ホテルのフロント曰く、桜井和人は一晩でワインを3本あけてますからね。こんなに飲むなんてヤケ酒のレベルかと思えます。そうするとホテルで何か大量に酒を飲むことになったきっかけ、すなわち飲まないとやっていられないような嫌なことや辛いことが前日にあったとの推測も可能です。いずれにせよ、これだけ飲んでますから寝坊というのは考えられますよね」細谷は笑顔で嘉子の推理を擁護した。

「それに……。桜井和人はタクシーをトンネルに待たせていなかった」

「じゃあ単に寝坊したってことですか？」

「そう考えるのが妥当かと……」

「ホテルに來た女性はすぐ帰ったのかな？」

今度は社長が嘉子に聞いた。

「いや1時間位して帰りましたけど」

ここまで口にした途端、嘉子のはっとして気が付いた。

「どうやって夜中に家に帰ったんだろう？」

「それでしたら我々が調査をしています。この時間駅前のタクシー乗り場から東京まで一人の女性客が乗っていたのを確認しています」

「東京ということは桜井幸子さんですか？」嘉子は驚いた。

「そうです。田中慶子かと思いきや実は桜井幸子でした。タクシーの運転手から裏が取れています。この時桜井幸子は黒縁メガネを外していたようです」

細谷は話を続けた。

「ちなみに翌日桜井和人がトンネルまで行った時の裏づけも取れています。私達とは違ってタクシーをその場で待たせずにトンネルで降りています。多分そこで同僚達と合流する予定だったか、もしくはそこから帰らないつもりだったのでしょうか」

「自殺ということですか？」

「どうでしょうか？わざわざトンネルで亡くなる計画を立てていたと考えると、誰かに突き落とされたように見せかけたかかったことになりそうです。要するに桜井和人が前日の夜に誰とどのような話をしたかが分からない限り、これ以上推測は出来ないということですよ。何より物的証拠は今回の事件にはありませんから」

「細谷さん、この手紙は誰が出したか分からないかな？ずっと手元においてあるんだが、どうも気分が悪くてな」

「パソコンで打たれたものですし、指紋も残っていませんから、差

出人の特定は打ち出したプリンターの特定が出来たとしても、量産されているものですから・・・」

「そうかあ、調査も行き詰ってしまったな。推測も出来ないんですか？」そう言うと社長はテーブルの上に置いてあったお茶を一口含んだ。

「一般的な推測としてですが、手紙の差出人はこの旅行中に殺人が行われることを事前に察知もしくは聞いていた人だと思えます。ただ、何らかの理由で加害者には殺人を犯して欲しくなかった・・・」

「そしたら、この手紙を警察にタレ込むことは出来ませんか？」

嘉子がそう言うと、社長は細谷に頭を下げた。

「何卒手紙の存在は内密に出来ませんか、細谷さん？」

社長の細谷に請うような目をしている。

「かしこまりました。お客様は絶対ですからご安心下さい」

細谷がそう言うと社長は分厚い茶封筒を渡した。

「今までありがとうございます」

「いえ、犯人を特定する材料を集められずに申し訳ありませんでした。調査報告はこちらです」

そして細谷がA4用紙の10枚程度の「報告」とだけ書かれたレポートをテーブルの上に差し出した。

「ちょっと待って、細谷さん今日で最後なの？」

嘉子は持っていた湯のみ茶碗を急いでテーブルに置いた。

「すまん、よっちゃん。これ以上はさすがに会社の金では出せないんだ」

「そんなの経費で落とせばいいじゃない、お父さん社長でしょ」

「それをやると今度は税務署が来てな、またお父さん警察に拘束されるかもしれないじゃないか。前もそうだ、よっちゃんがどうしても私立小学校に行きたいって言うから、コネクション構築経費を経費で落としたいんじゃないか。
なあよっちゃん、こついうのはあまり額が多いと、すぐに見つかってしまうものなんだよ」

二人が目の前でもめているのを見ていられず、横から細谷は口を挟んだ。

「大丈夫ですよ嘉子さん。あなたは既に立派な探偵ですから」

「・・・」嘉子は何も言えなかった。

そして細谷は深々とお辞儀をして社長室から出て行った。

21

「ちよつと、何考えてるのお父さん？これで捜査は打ち切りで私はカウンターに戻っていいってこと？」

「そういうことではないよ。これからが勝負だ」社長は嘉子を激励しているのか、自分の両膝を手のひらでたたいた。

「ちよつと、これからが勝負ってどういうこと？」「てかちよつといい？」

嘉子はそう社長に言うとテーブルの上に置かれた報告書を手を伸ばした。表紙をめくると「ご依頼：桜井和人殺人事件犯人の特定」というタイトルがついていた。そして両手でつかみ食い入るように読み始めた。

「桜井和人死亡につき、情況は以下3つに絞られます。

1・自殺

桜井和人が7月3日トンネル付近から飛び降りた。理由は前日の夜に桜井幸子とホテルで話した何かがきつかけと考えるのが自然。ただ自身が何かに嫌気がさしたことによるものか、幸子の為を思っているのかは不明。幸子から脅迫されて身を投げた可能性は、死因が自殺の場合保険金が受け取れなくなることからありえない。

2・自ら足を滑らせただけ

転落現場に争った形跡が無いことによるあくまで推測。ただし可能性がゼロとは言えない。

3・他殺

吉田真理子によるもの。転落現場で何かしらの理由により桜井和人と出会い、何かしら言い争いになり、勢いで突き落としてしまった。突発的に起きた事件であり、現場証拠がないのもそのため。

目撃証言が得られないのは同僚がかばっているか、同僚が見ていない時に起きたから。トンネルと現場が150メートル離れていることから後者が有力。そもそも同僚はトンネルを見学するために現地を訪れている。これだけ離れた場所に行く必要がない。目撃証言が取れないのは必然。

手紙の差出人は角田元と考えるのが妥当。

桜井幸子が7月2日に田中慶子に変装をしてホテルに行った理由は、ホテルで桜井和人を殺害しようと考えていたため。それ以外に彼女が変装する理由は、田中慶子に濡れ衣を着せる目的以外でわざわざない。

桜井幸子の殺害は角田元と共同で計画されたと考える。少なくとも

角田元は桜井和人が7月2日に幸子によって殺されることを知っていた。やもなければ一晩子どもの面倒をみる依頼など受けない。子どもは桜井幸子がこの夜どこかに消えて、角田という男が隣にいたことを父親である桜井和人話すのは止められないからだ。ただ実行直前になり、桜井幸子の手を汚させたくなくなり、事前に事件を防ぐ目的で手紙によって旅行そのものを中止させようとしたと考えると話の辻褄は合う。そしておそらく翌日の7月3日に角田元は幼稚園を欠勤し桜井和人を殺す予定だったのだろう。

以下添付資料は警察による状況把握及び関連写真」

レポートにはそのように書かれていた。2枚目以降は吉田真理子、桜井幸子、角田元の事情聴取時の様子が細かく記されていた。

嘉子は一通り目を通した。

「ちよっとこれって語尾が考えるとか推測されるばかりじゃないの。ここから先私に現場証拠と証言証拠を集めて、犯人を特定しろって言うの?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1823z/>

つまらない旅行殺人事件

2012年1月6日16時50分発行